

送り手のメディア・リテラシー： 民放連プロジェクト実践者へのインタビューから

Practitioner's Media Literacy:

Interview Research for Broadcasters of NAB Japan Media Literacy Project

水越 伸*・林田 真心子**

Shin Mizukoshi, Mamiko Hayashida

1. 送り手のメディア・リテラシーと民放連プロジェクトの概要

この論文は、2001年度以来、日本民間放送連盟（以下、民放連）とおもに東京大学水越研究室のあいだで進められてきた共同研究、「日本民間放送連盟メディアリテラシー・プロジェクト」（以下、民放連プロジェクト）¹のなかで、とくに放送局で働く人々、いわゆる送り手がいかにメディア・リテラシーを学んだか、そ

れによってどのような意識や態度の変容が生じたかについて、プロジェクトに関わったローカル民放局の関係者への聞き取り調査をもとに明らかにしていくことを目的としている。それによって、これまで看過されてきた送り手のメディア・リテラシーのありようを素描し、提示することまでを射程としたい。

1.1 送り手のメディア・リテラシーの系譜

民放連プロジェクトの概要については、本論の筆者たちや民放連関係者によって、すでにいくつかの書籍、論文や報告書において明らかにされてきた²。ここでくり返しその詳細は述べないが、その経緯と概略はほぼ次の通りである。

1990年代に放送業界で相次いでやらせ事件や関係者のスキャンダルが問題となり、視聴者からの批判が大きな高まりを見せた。そのなかで放送局で働く人々の間から、放送がどのような仕組みでできているか、なにが問題なのかをあらためてとらえなおす動きや、エリート対大

衆、プロ対素人で二項対立化してしまいがちな放送関係者と視聴者の間に対話の場を設けようという努力が生じてきた。

もっとも早くに動いたのはNHKの労働組合である日放労だった。日放労は1995年度にメディアリテラシー研究会を設置、そこでの成果は新書サイズの書籍³として出版された。本論の筆者の一人である水越は同研究会のメンバーであり、執筆者の一人であった。この中では、新たな情報技術が登場し、メディアの送り手と受け手、表現者と受容者の垣根が低くなり、た

*東京大学大学院情報学環

**東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：送り手、メディア・リテラシー、アクション・リサーチ、ワークショップ

がいが循環するような時代状況の中で、送り手から受け手に至るすべての人々がメディア・リテラシーを持つこと、メディアをめぐる全体性を回復することの重要性が唱えられた。その流れの中ではじめて、「送り手のメディア・リテラシー」という概念が提示されたのである⁴。

1999年、民間放送の業界団体である民放連がメディア・リテラシー活動を開始した。当初はこの考え方を普及促進するための番組づくりなどをしてきた。2001年度以降は、冒頭の民

1.2 民放連プロジェクトの概要

民放連プロジェクトとは、ローカル民放局の関係者と地元の青少年を結びつけ、互いが協力しながら番組をつくって実際にオンエアをし、その過程で送り手と受け手がともにメディア・リテラシーを学んでいくことを目指した実践的な活動だ。2001年度、02年度にテレビ信州、東海テレビ放送（以上2局は2年度間）、東日本放送、RAB毎日放送でパイロット研究をおこない、06年度からは民放連加盟局からの一

・表現からのアプローチ

これまでの放送をめぐるメディア・リテラシー活動は、啓蒙的、理知的な観点から、番組表象の批判的分析などをおこなうものが一般的だった。民放連プロジェクトでは、あえて番組作りのような表現活動、身体を動かしてグループでものを作る活動を経験することで、番組や放送というメディアについてより深い理解を得るというアプローチを取った。すなわち、表

放連プロジェクトを水越らとの共同研究のかたちで展開してきている。公共放送の労働組合と民放の業界団体という、ある意味で対角線上に位置するような組織が、ほぼ同じ時期にメディア・リテラシーにアプローチしたことは注目されてよいだろう。しかもそれらはいずれも「送り手のメディア・リテラシー」という、それまで語られることがほぼ皆無だった概念をたずさえて展開されたのである。

般公募のかたちをとって毎年進められてきた。2010年度の文化放送まで、全国各地の17局で実践がなされてきている。同プロジェクトの調査で明らかになったのだが、プロジェクトの継続展開とともに民放関係者の間でメディア・リテラシーへの理解や具体的な取り組みが増してきたことは付記しておくべきだろう。

民放連プロジェクトは次の二つの特徴的なアプローチのもとに企画、実践されてきた。

現から入って、より鋭角的な批判的受容を生じさせ、批判的受容に則った新たな表現を生み出し、さらにそれが受容を高めるといようならせん的な向上を目指したのである。

端的に言えば理屈から入るのではなく、身体を動かして人と協働するなかから、メディアの問題を我がこととして引き受け、体感するというアプローチを取ったのだった。

・送り手と受け手が学びあうこと

一般的に放送局が子どもたちや市民と接する場合、専門家の放送人が非専門家の人々に一方的に教えてあげるといふかたちをとる。各局で現在展開されつつある出前授業の多くは、プロの技に素人がちょっと触れてみるよい機会とはなっている。しかし昨今の放送業界で起こっているスキャンダル、事件、倫理的問題などを見渡したときに、あるいは市民メディアの一般化、ネットやケータイの普及といったメディア状況の変動を踏まえたときに、はたして局の人間が放送のすべてを知っていて視聴者より上に位置するといえるのだろうか。さらにいえば、メディア・リテラシーという営みによって覚醒された市民のメディア批判をきちんと受けとめ、送り手と受け手がともに新しい時代の放送のあり方を模索していく必要があるのではないか。

そうしたことを射程に入れ、従来の出前授業の域を超えた、受け手とのコミュニケーションを通して送り手もメディア・リテラシーを鍛えることができるプログラムがデザインされた。いい方を換えれば、ここでいうメディア・リテラシーは、受け手が送り手を一方的に告発するタイプのもので、送り手が受け手に一方的に教えるタイプのものでなく、送り手と受け手が循環的に学びあうことができるようなワークショップが企画開発・実施されたのである。

これらのアプローチから育まれるであろうメ

1.3 目的と構成

さて、民放連プロジェクトは2006年度以降、各地の実践に関わった送り手と受け手にアンケートとインタビューで事前事後の調査をおこ

ディア・リテラシーは、マスメディアを批判的に読み解くことに特化した旧来のそれとは大きく異なり、内外で議論を呼んだ。その詳細は述べないが、ネットやケータイ、わけでもソーシャル・メディアが普及する今日、批判的な読み解きだけではリテラシーが成り立たないことは明らかになりつつあり、送り手や表現者の立場や技能を射程に入れたプロジェクトの構想には一定の先進性があったと筆者らは考えている。

あらまし以上のようなメディア・リテラシーの育成を試みた民放連プロジェクトは、デジタル時代において、おもにローカル民放局が市民参加型、クロスメディア型の放送局へと転換していくための準備的活動としての意味合いを持っていたことも忘れてはなるまい。この点は本論の後半に出てくる、過去の実践局の送り手らのなかに生まれた放送をめぐる状況認識の変化と結びついてくるからである。

このような先鋭的な活動にマスメディアの業界団体が取り組むこと、しかも研究者らのチームとともに取り組むことはかつてなかったといってよい。そこには当然、軋轢や葛藤も少なくなかった。しかし関係者全体が一つのゆるやかなコミュニティをなしつつ、その意義や可能性を広めて今日に至っているのである。

ない、その評価分析をおこなってきている⁵。そのなかで注目すべき一つの点は、民放連や水越研究室関係者が思った以上に、放送局の人々に

対するインパクトが強く、そこからさまざまなことが学ばれていたことが明らかになってきたことである。もちろん青少年（多くの場合は中高生）にもインパクトは強く、得がたい経験となっていた。しかし通常業務の間に忙しく実践をこなした放送局員は、日頃やったことがない子どもたちへの指導や協働を経ることで、ヘトヘトに疲れてしまうことが多かった。そんな、ある意味で破天荒なプロジェクトなので二度とやりたくないという反応が多いかと思ったがそれはほとんど見当たらず、むしろ採算を度外視したかたちで子どもたちとの交流や、プロジェクトの継続をはかるケースが多かったのである。

すなわちプロジェクトの企画デザインをした側の思惑を超えて、民放連プロジェクトで学び、のめり込むケースが多く見受けられるのだった。さらにそれらの人々の言動、たとえば放送局や社会のとらえ方自体にも、送り手自身が放送の現状を批判的にとらえるようになるなど、それまでになかったものが見聞きされるようになってきた。一体何が生じているのだろうか。プロジェクト事前事後の調査は単年度ごとの調査だった。より長期間を経ることで、放送局の

1.4 送り手と受け手という概念について

この章の最後で送り手、受け手という概念について付記しておく⁷。

送り手、受け手は、マスコミュニケーション研究から生まれた概念である。この領域が20世紀前半のアメリカで、通信工学的なモデルを援用してコミュニケーション現象を図式化してとらえた際、メッセージの送り手 (sender)、受け手 (receiver) という表現がなされた。その

人々の意識や態度がなぜ、どのように変わったのか。それはこれまで詳しく調べられたことがなかった。そのあたりを詳しくインタビューし、そこから見出されることばを素描することがこの論文のテーマである。

本論の構成を示しておこう⁶。

2章ではまず、もっとも最近、2009年度に九州朝日放送（以下、KBC）のラジオで展開された実践を事例とし、送り手、受け手それぞれへのインタビュー内容を比較検討することで、とくに送り手がいかなるメディア・リテラシーに覚醒したかを明らかにする。

3章では、2章で明らかになった二つのことばを、過去に実践をおこない、より長期間が経過した送り手たち（大半は何らかの実践を継続している担当者）への長時間インタビューでの語りと照らし合わせてみる。少なくとも数年という期間を経たなかで、送り手のメディア・リテラシーと呼べるものがどのように変容しているかを検討する。

4章では、このような実践型の研究プロジェクトがアクション・リサーチとしてもつ意義や可能性に言及してしめくりたい。

後英語圏では、このいい方はなされなくなり、その代わりにマスメディア、あるいはメディア、時にはメディア実務者 (media practitioner) とオーディエンスということばが用いられるようになっていった。

一方、アメリカのマスコミュニケーション論を戦後受け容れた日本の研究者の間では、なぜか送り手、受け手という表現が長く使われるこ

とになった。受け手研究といういい方は、カルチュラル・スタディーズの隆盛によって90年代半ば以降にオーディエンス研究といういい方が台頭したあとも、依然として使われている。しかし、送り手研究といういい方はおよそ1970年代くらいまで使われたものの、その後はマスメディア産業論という名称に代替されていくようになった。新聞論、放送論といった個別マスメディアに即した実証的研究のなかにも送り手の組織論、産業論などが組み込まれていた。すなわち学問的には、送り手研究という名称は一般的に使われなくなって久しい。

1990年代に入ると新たな情報技術やメディアが台頭し、それらを活用して一般の人々がメディアで表現をおこなうようになってきた。それらの現象はネティズン、市民メディア、新しいメディア表現者の台頭などといったかたちでとらえられた。21世紀、ネットやケータイの普及が飽和状態に近くなってくると、一般の人々がメディア表現者となることが特別なことではなくなり、グローバルな経済破綻の影響によって20世紀型のマスメディアが構造的に瓦解しはじめたことも重なって、送り手と受け手という旧来の概念の自明性が問い直されるようになってきている。

しかしネットやケータイの普及がすべての

人々を等しく表現者に行っているかといえばそうはなっていない。アルファ・ブロガーがもてはやされ、有名人のツイッター・アカウントにフォロワーが集中する状況からは、新しいメディアのマスメディア化の傾向が顕著に見出せ、そこにビジネスチャンスがうかがうメディア資本は枚挙にいとまがない状態である。かつてのように送り手と受け手を固定的にとらえることはもはや意味がないだろう。しかしそのことをわきまえ、このようなメディア状況の中で、送り手と受け手を相対的で柔軟で相互交換可能な役割概念ととらえていくことには、筆者らは依然として有効性があると考えている。

ただし、送り手と受け手という概念は情報伝達、メッセージ通信からの比喩であり、メディアを創作された作品ととらえた際の表現者と受容者、あるいは大衆社会における商品ととらえた場合の生産者と消費者という対概念と重なりつつ、異なっている部分があることに、筆者らは気づいている。この論文で送り手、受け手と呼ぶことがらは、正確にいえば「相対的にみた送り手／表現者／生産者」、「相対的にみた受け手／受容者／消費者」と記すべきであろう。それが煩雑なために送り手、受け手という用語を用いていることをご理解いただきたい。

2. KBC実践における送り手の覚醒

2.1 実践の概要

KBCラジオでの実践（以下、KBC実践）は、福岡市内にある福岡大附属大濠高校（私立男子校）と筑紫女学園（私立女子校）とい

う、それぞれ名門の私立男子校、女子校の生徒たちと、福岡で活動するNPO法人「子ども文化コミュニティ」との協働で、2009年8月

から2010年4月にかけて進められた。大濠高校と筑紫女学園からはそれぞれの放送部に籍を置く中高生16名（うち中学生1名）が参加した。中高生がKBC局員や子ども文化コミュニティ関係者とともに、「食べる」をテーマとする15分ほどのラジオ番組3作品を制作。最終作品は、KBCラジオ『おっきーのラジドラ学園』（毎週木曜深夜0時30分～1時放送）で放送された。KBC側は5～6名のディレクター、アナウンサー、営業などからなるプロジェクト・チームを編成し、中高生とともにテーマ設定から企画、取材、録音編集までをおこなった。⁸

KBC実践について水越（2010a：118）は、その特徴として、「従来の活動と放送枠があった」ことや「NPO子ども文化コミュニティとのコラボ」などをあげている。第一の「従来の活動と放送枠」とは、参加した中高生は、すべて学校の放送部員であり、番組作りを全く知らなかったわけではなかったことだ。KBC側も『おっきーのラジドラ学園』でこれまでも中高生が作った番組を放送した経験があった。

第二は、地元のNPO法人である「子ども文化コミュニティ」とコラボレーションをしながら

2.2. 送り手と受け手のとらえ方

KBC実践でのインタビューは、事前事後の2回おこなった。すなわち最初の顔合わせがおこなわれた2009年8月22日と、完成作品の発表会が行われた2010年2月7日である。質問内容は、駒谷真美が2007年度からおこなってきた「民放連プロジェクト参加者調査」で使用している一対一のインタビュー項目を用いた。

ら進められた点である。子ども文化コミュニティは、代表の高宮由美子氏を中心として、子どもの文化活動などへの参加を通じた社会参画を促進していこうと多岐にわたる活動を行っている。KBC実践では、全8回のワークショップのいくつかを、異年齢の子どもたちとの文化交流や、日常からの学びを視点に、中心となって企画した。たとえば、番組のテーマの「食」をめぐっては、実践開始当初に、子ども文化コミュニティの小学生とその親とともにランチパーティを企画し、ゆっくりと情報交換をする場を設けた。持ち寄ったお弁当をみんなで分け合って実際に食べることで、それぞれの家庭の食文化や、親の悩みや子どもの気持ちを自然と知り合えるというわけだ。同時に、まだ慣れ親しんでいないKBCスタッフと中高生の距離を近づけるアイスブレイキングのねらいもあった。彼らが第三者として入ることで、局と子どもたちという線形の構図が循環形へと展開し、実践の過程で煮詰まりをもみほぐしたり、送り手・受け手の文脈をほどよくほやかし、従来のマスメディアの枠組みを乗り越えていくといった効果があったのだ。

音声データはICレコーダーに記録した。対象者は、大濠高校の生徒2名、筑紫女学園高校の生徒2名、実践に中心に関わったKBC局員1名、ディレクター1名の合計6人で、2回とも同じ人物とした。ここからはインタビューの詳細をみていく。詳細は別表に示した⁹。

表1 KBC事前インタビューの主な内容

	中高生	送り手
実践前の心境	「期待しかないです。やれるなら、とことんやりたい。おもしろいこともしたいし、まじめなこともちゃんとやっていきたい」「複雑な気持ちです」「面白そうに思ったんですね。ただ単に。なにかクリエイティブなことしたいなあと思ったんで、いい機会なんで参加しようと思って参加しました」「(期待と不安は?) 半々ですね。すごいいいのがつくれたらいいなあというのはありますが、なんかちょっとドジっちゃうと後ろめたいなあみたいなのがあります」	「ぶっちゃけていうと流れていうか」「最初は自信が。もう全然まかせてくださいって感じだったんですけど、だんだん不安になってきて(中略)。僕らがいろいろ教えるって立場っていうのは今までもあったんですけど、僕らもいっしょに学ぶっていうところで、ちょっと行き詰まるどころがでてくるんじゃないかなあと思って」「僕にどんな刺激があるかなっていうのが一番の楽しみかなっていう」「(最初は)驚きもあるんですけど、ラテ業界、人が減っていて。1人の負担がものすごく多い。なので、極力仕事を減らしたいなってところがあるんですけど(中略)いい勉強にはなるかなっていうのはあるんですけど、中高生とか学生。接する機会もないし、そういう意味では何かのいつか糧にはなるだろうというところはあんですけど」「最終的にはいいかたちになるんじゃないかなとは思っています」
メディア・リテラシーについて	「知らないです。(質問:あまり聞いたことない?) はい」「授業で習ったんですけど。(中略)情報格差とか?情報に関する何かかな」「視聴者の方にどれだけ伝えるかっていう、そういう発信者の学っていうか、そのおおもとになるものだと思います」「知らないですね」	「意味がまだのみこめていないというのが1つ。一生懸命自分なりに調べたりしたんですけど、やっぱりなんとなくわかるんですけどなんだろうって。人に説明するとき、たぶんできないくらいわかってないんで。むずかしい。(中略)あと、硬いっていうイメージですね」「いまの意識としては、子どもたちも学んで、ほくらは学べるという双方にメリットがあるものだと感じました」

(1) 実践前の心境

表1によれば、中高生たちの参加当初の心境は、「複雑な気持ち」「(期待と不安が) 半々」と、複雑だった。中高生にとって、放送局は普段から縁遠い存在であり、そのうえ民放連という、よくわからないけれど東京の仰々しい感じがする組織や、大学やNPOなどの見知らぬ大人が関係しておこなわれる実践に参加することは気が重く、少なからずプレッシャーを感じていた。それは、後述する事後インタビューの「マスメディアは機械のなかのこと」という語りや、実践は「ビッグ」な出来事だったと答えていることからもうかがえる。一方で、みな放送部に所属していたため、「クリエイティブなことしたい」「おもしろいこともしたい」とか、放送局の機材に触れられること、本格的な番組がつけれるという制作意欲には湧いていた。

送り手のほうは、業務の一環として、突然上

司から提案されたことに少し戸惑った様子で、日常業務とのバランスを危惧しながらも、自分たちがこのプロジェクトに参加することをおおむね好意的には受け止めていた。

次にメディア・リテラシーという言葉について、事前に「どういうものか」とたずねた。中高生はほとんど「知らな」かった。学校の授業で言葉を聞いたことはある人もいたが、はっきりとは理解していなかった。

送り手も「意味がまだのみこめていない」「むずかしい」「硬いっていうイメージ」と話した。メディア・リテラシーを全く知らない人もいると同時に、少し、あるいはほんやり知っている場合でも、自分たちの日常生活や放送局での仕事と結びつけて理解されることのない、すなわち自分たちの日常経験の外側にあることばとしてとらえられていた。

(2) 実践後の中高生

では、半年以上にわたる実践を経て、彼らのインタビューを表2でみてみよう。
心情はどのように変化したのだろうか。事後イ

表2 KBC事後インタビューの主な内容

	中高生	送り手
実践後の心情	<p>「しんどかったというか、長いようで短くて」「長いようで短かったんでしょうけど、確かに土日返上でしっかり大変だったのは大変だったんですけど、ここまでいいものができたなあと自分では思っているんですけど」「苦労があったからこそ、その達成感がおっきいじゃない」「試行錯誤しまくりの半年間でした。(中略)伝えたいことがあるんですけど、どうやって構成していけばいいか、それにつながるのかの行程がよくわからなくて」「なんかほんとに大変でつらくて。(中略)達成感というか、自分がつくった、いっしょにプロの方たちと作らせていただいているっていうのが、やっぱりそっちの方がうれしくて。お褒めのことばいただいたときはヨッシャみたいな」</p>	<p>「正直、大変だったなっていうのが最初の終わってみての印象。(中略)僕も勉強できましたし、彼女(中高生)たちもみるみる成長したなというか、まあ違うなあというふうながありましたから」「刺激が、やっぱり自分の発想力がかわりましたね。いろんな面で。(中略)ああ、今の中高生たちはこんなこと考えてるんだとか」「みんな(中高生)の話、企画と、自分もっているものが違うので、それを言ってくれて成り立つものというか。それで僕は刺激をうけるので、変な話、自分のためなんですけど、自分のためとして考えたら、そういう刺激をほしいなあ。(中略)中高生に取材とか週に一回行ったりとかしてるんですけど、(中略)想像した通りの答えしかかえってこなかったりするんで、(今回の中高生が)そうじゃない、ちゃんとやっぱり自分があって、考えて、発言してくれるようになったという意味では、自分のためになったかなあと思います」「感動しました。泣けてくるというか、こんなに仲良くなるとはおもわなかったし。最初は仕事の合間にやるというか。最後は、自分から率先してみなさんと接することができた」「ひとつひとつの会話も楽しかったんですけど、(中高生が)乗り越えようとする姿をみて、すごいがんばってるなあと思って」「一時的な取材じゃ得られない。いっしょに乗り越えてきた感がすごいですね」</p>
メディア・リテラシーについて	<p>「最初にHさん(放送局員)に聞いたら情報を批判する力、と。最近で言えば政治なんですか、小沢さん?(中略)やっぱり目で見て、耳で聞くのが一番だと思います。(中略)朝青龍の引退とかもありますけど」「まあ、その番組を作っていく過程の選別というか、どの情報を伝えればどう伝わるのか。うまく伝えるにはどうすればいいか。情報いっぱいあると、選ばないと、抜き出さないといけないので、そういうのがメディア・リテラシーなんだなあ実感しました」「メディア・リテラシーそのものの意味はまだよくわかっていないんですけど、作ることの楽しさとか大変さとか」「まだメディア・リテラシーを説明しろとか言われたら、エッていう感じにはなるんですけど、なんかやっぱり、発信者が思ってこそ相手に伝わるし、受け手も、こう、その情報からいかに情報を得るかで、その受け手と、リスナーとのキャッチボールじゃないですけど、そういうのが成り立っているんじゃないかなあと思いました」</p>	<p>「一番、メディア・リテラシーという言葉をはかっているんじゃないかというくらい。情けないんですけど。最後までそこだけは。いまだに模索している感じですかね」「後輩の人間に教えるのと、学ぶのとの違いはこういうことなのかと思ったり。逆に、自分より下の人間に教えるって感覚じゃなくて、今回のメディア・リテラシーみたいな感じで、自分たちに考えさせるといことはさせていきたいなあっていうのは、ただあんまり能率まで考えると仕事なんであれなんですけど、そういうことは思いましたね」</p>

まず、実践を率直に振り返った中高生の感想は次のようなものだった。

「しんどかった」「長いようで短かった」「苦労があったからこそ、その達成感がおっきいじゃない」「試行錯誤しまくり」「大変でつらくて」。これらからは、日頃は接触することがない放送局のプロたちと出会い、数ヶ月にわたって、学校という共同体のさまざまな規範や十代のライフスタイルなどとは大きく異なる状況のなかで葛藤していたことがうかがえる。実践プロジェクトに仕組まれたいくつかのプログラムをこなし、番組づくりという目標へ向けて協働するなかで、異文化コミュニケーションが生じ、葛藤を乗り越えることができたといえる。水越は、こうした感覚を「playful & hard fun への気づき」（水越, 2010a : 118）としている。

次に、中高生のメディア・リテラシーに対する認識はどう変わったのか。端的にいえば、事前には抽象的ではんやりしていた認識が具体的になった。しかもとても饒舌に、自らのことばで具体的経験を踏まえて語るようになったのであった。

「最近で言えば政治なんでしょうか、小沢さん？（中略）やっぱり目で見て、耳で聞くのが一番だと思います。（中略）朝青龍の引退とかもありますけど」¹⁰。この発言からは、発言した生徒が、KBC実践の経験をもとにして、マスメディアを通して表象される著名人のイメージが、いかにつくられたものであるか、操作可能なものかを批判的に理解していること、そのうえで実際に見聞きする、つまり取材することの大切さを強調していることがわかる。

「まあ、その番組を作っていく過程の選別というか、どの情報を伝えればどう伝わるのか。うまく伝えるにはどうすればいいか。情報いっぱいあると、選ばないと、抜き出さないといけないので、そういうのがメディア・リテラシーなんだなあ実感しました」。この発言はメディア・リテラシーの抽象的な定義とはなっていないものの、おもに番組制作の過程で重要な選択編集活動についての理解の一端を示している。

それは、作品の出来映えや、成果をたずねた質問においても現れていた。表3の通りである。

表3 作品に関する中高生インタビューの主な内容

	中高生
作品を振り返って	「（1回目の収録と、2回目の収録では）空気が、ラジオの空気がやわらかくなって、（中略）なんというか、まあ、自作したからかもしれませんが、愛着じゃないけど、聞いていて飽きないというか」「ラジオ、テレビというメディア、マスメディアはやっぱり機械のなかのことなので関わりがないです。そういう世界の中に、一般の中高生の俺たちが入る、関わる。本当にビッグじゃないかなと」「自分で独りよがりな考えで番組をつくっても（ダメで）、人の意見を取り入れる。それこそ、大人の方とか、保護者の方とか、（意見を）取り入れると、全然違ったいいものができるんだなあということ学びました」「大変だったということはいまだにあるんですけど、なんてか、こう、自分でつくっていくなかで、まあ、大切なこと。なにかこう、創作するということ自体の中心的ななにか、なにか、なにかなんですけど、みえたような気がします」「インタビューとかみても、今までは、は〜んとかいうふうにはか思わなかったんですけど、（番組を）一本見るたびに、撮るのが大変だったんだらうな、とか。（中略）お〜お疲れです、みたいな感じで」「（ラジオは）目でみれば簡単に伝わることを言葉でいわなきゃいけないので、（中略）それは大変だになって」

ここでいう「(マスメディアは)機械のなかのこと」の「機械」とは、放送局が複雑に専門分化した会社組織として高度情報機器を使ってたえず番組を生産し、放送していくそのメカニズム、機構体のことを指していると考えられる。そうした機構体へ素人の自分が参画することの得難さ、機構体の人々と協働し、独りよがりではない、パブリックなメッセージを創作することの大切さが吐露されている。さらに、KBC実践を踏まえた彼ら／彼女らが、日常生活の中

(3) 実践後の送り手

では、送り手はどうか。まず、表2に詳細を載せた実践後の感想である。

「正直、大変だったなっていうのが最初の終わってみての印象。(中略)僕も勉強できましたし、彼女(中高生)たちもみるみる成長したなというか、まあ違うなあというふうなのがありましたから」「感動しました。泣けてくるというか、こんなに仲良くなるとはおもわなかったし。最初は仕事の合間にやるというか。最後は、自分から率先してみなさんと接することができた」「すごい、自分自身、楽しかったし、勉強になってよかった」。

ここからは、送り手が中高生と協働することを拒絶するのではなく好意的に受け容れ、苦楽をともにして創作した過程で共感を抱いていたことがわかる。そして当初は通常業務の合間にプラスして労務を抱え込む負担感を抱いていたのに対して、この活動がプラスされた労務ではなく、自分が学ぶことのできる重要な活動へと変化していったのであった。

メディア・リテラシーについてはどうか。

で放送を視聴する時、送り手の状況を想像しながら、すなわち創造的表現と結びついた批判的視聴をしていることが明らかになっている。

民放連プロジェクトは「身体を動かして人と協働するなかから、メディアの問題を我がこととして引き受け、体感するアプローチ」を採ってきた(水越, 2010b: 132)。中高生たちは、実践を通して、まさに自らの経験に寄りそうかたちで、より具体的に、マスメディアの問題を我がこととして引き受けたといえるだろう。

「一番、メディア・リテラシーという言葉がわかっていないんじゃないかというくらい。情けないんですけど。最後までそこだけは。いまだに模索している感じですかね」「後輩の人間に教えるのと、学ぶのとの違いはこういうことなのかと思ったり。逆に、自分より下の人間に教えるって感覚じゃなくて、今回のメディア・リテラシーみたいな感じで、自分たちに考えさせるということはさせていきたいなあっていうのは、ただあんまり能率まで考えると仕事なんであれなんですけど、そういうことは思いましたね」。

実践を通じて真摯に考え続けたことや、職務を見直す契機となっていることがうかがえるものの、明らかにとらえにくさは残っている。ここで、注目しておきたいのが、「今回のメディア・リテラシーみたいな感じ」という語りである。事前に今回の実践のテキストとして書籍『メディアリテラシーの道具箱』や前年度までの実践報告書が紹介されていたにもかかわらず、送り手は忙しさもあってそれらを充分には

読んでいなかった。そのためメディア・リテラシーにさまざまな領域や方法があるにもかかわらず、今回のKBC実践を唯一のメディア・リテラシーとしてとらえてしまう傾向が見受けられる。そのことは、このプロジェクトの経験者が異口同音にしばしば口にする「メディア・リテラシーする」という動詞化したことばに如実に表れている。民放連プロジェクトをおこなうこと、子どもたちと共同して番組づくりをすることが、すなわちメディア・リテラシーすること、ととらえられているわけだ。

このことは、本を読む、マジメに議論する、じっくり考えるといった態度（潜在的には、新聞、出版など活字メディアの気風と象徴的にと

2.3 二つの覚醒

ここまでKBC実践に関わった送り手と受け手の事前・事後のインタビューを踏まえ、それぞれの意識や態度の変化をたどってきた。ここからはこの実践が送り手にどのような変化をもたらしたか、いわば送り手が何に覚醒し、送り手のメディア・リテラシーと呼べるものを手に入れていったかに絞って検討してみよう。さしあたり二つのタイプを見出すことができる。

第一は、受け手像の刷新である。

「刺激が、やっぱり自分の発想力がかわりましたね。いろんな面で。（中略）ああ、今の中高生たちはこんなこと考えてるんだとか」「中高生に取材とか週に一回行ったりとかしてるんですけど、（中略）想像した通りの答えしかかえってこなかったりするんで、（今回の中高生が）そうじゃない、ちゃんとやっぱり自分があって、考えて、発言してくれるようになった

らえられているかもしれない）に対して、身体を動かし、面白く話し合い、スピーディに流れていくのがテレビ屋、ラジオ屋としてのスタイルだという暗黙の規範によっているかもしれない。つまり、現場で実践されたこと以上に思考を深めたり、抽象化したりする態度を禁忌する傾向があるから、送り手が民放連プロジェクト以外のメディア・リテラシーを探ろう、理解しようとしなさいということである。また、視聴者による番組の批判的読み解きを無意識のうちに避けようとする送り手の心情を反映してもあるだろう。このあたりについては別途議論を深めたい。

という意味では、自分のためになったかなあと思います」。

中高生との番組作りは、ワークショップや取材、録音など、直接対面しての活動だけではなく、毎日のようにメールをやりとりしながら進められた。民放連プロジェクトは最終的に、子どもたちが制作した番組をオンエアすることがもとめられているため、「ごっこ遊び」で終わることができない真剣さがともなう。そうした本格的な協働作業は、イメージとしての若者ではなく、リアルな彼らの実態に触れる得がたい機会となっていた。送り手にとって中高生は、普段の取材のなかでは街角で若者の声を拾うためのネタや素材である。そこでは送り手は若者に典型的とされる声を拾おうとしているわけであり、「想像した通りの答えしかかえってこなかったりする」。しかしKBC実践のなかで、

中高生たちは「ちゃんとやっぱり自分があって、考えて、発言してくれるようになった」というのだ。送り手は、それまで抱いていたステレオタイプ化した受け手像や、自分たちとは異なるものの見方を手に入れることになったようだ。

第二の特徴は、構造的状況認識とでも呼ぶべきものを獲得したという点である。中高生はKBC内部の文化規範を知らないため、技術的なことから局内組織体制に至るまでナイーブな質問をあれこれしてくる。それらがいかにも的外れだったり、常識はずれのものであったとしても、送り手はそれらにことばで丁寧な答えをいかざるを得ない。その過程で送り手は、じつ

3. 過去の実践者における覚醒の展開

2010年度の民放連プロジェクトは、2001年度以降の実践を総括し、過去の実践局の現状を調査し、継続している活動の評価やアドバイスをおこなうことを主な目的としている。2009年度までの16局のうち、半数の8局が独自に活動を続けていること、5局がプロジェクト終了後続けていないか、あるいは2010年度に限って続けていないものの何らかの活動を再開したいと考えていること、3局が続けておらず、今後も再開の意志がないことが明らかになっている。この比率をどのように評価するかは検討に値するが、ここでの目的ではないのでおいておく。

民放連プロジェクトを過去に経験した送り手たちが短くて1年、長くて9年という歳月を経るなかで、プロジェクトそのものやメディア・

は自己中心的、平面的、断片的にとらえていたことがら、たとえば自分の仕事の放送局内での位置づけ、放送局が置かれた社会的、技術的状況などについて、より構造的な振りかえりを余儀なくされたのだった。

受け手像の刷新と構造的状況認識の発生。KBC実践から見出された送り手のメディア・リテラシーの構成要素、あるいはその一部と考えられるこれら二点は、過去の民放連プロジェクトの送り手にも生じていたのだろうか。もし生じていたとして、これらの要素は実践終了後、送り手の意識のなかでどのように変化したのか、しなかったのか。このあたりを次章で明らかにしていきたい。

リテラシーをめぐる認識、職業意識や放送局に対する意識がどのように変化してきたかについては、だれも調査を手がけてこなかった。本章では2010年度におこなった過去の実践局へのインタビュー調査の結果をもとに、KBC実践で見出せた送り手のメディア・リテラシーを構成すると考えられる二つのトピックに対する検討を深めていく。

インタビューの対象は、2001年度から2008年度の間民放連プロジェクトを経験した放送局員5名である。現在も何らかのかたちでメディア・リテラシー実践を継続している局の送り手が4名、全くしていない局の送り手が1名。インタビューは一对一のオープンエンド方式で、1人をのぞいてICレコーダーで記録した¹¹⁾。

3.1 5つの語りのカテゴリ

インタビューは短いもので1.5時間、長いものでは4時間にもおよんだが、共通して1) 実践に参加したきっかけや当時の状況、2) 自分にとって実践はどんな意味があったのか、3) 現在の状況、の3つを尋ねた。つまりおおまかに時間軸に沿って意識や心境を尋ねていったわけである。その内容を時間軸から切り離し、表4のように5つのカテゴリに分けて整理しておくことにする。

第一はマスメディア批判をめぐる語りである。社会的なマスメディア批判に対して、マスメディアで働く送り手自身がどう思っているのかを表明した語り、あるいは送り手自身がマスメディアを批判する時の語りである。第二は、むずかしいけれど楽しいという実践の感覚、計算幾何学者であり発達心理学者であるシーモア・パパートがいう「ハードファン」¹²に関する語りである。ここでいう「ハードファン」とは、日頃放送局ではけっしてやらない非日常的な活動を、放送局にはけっしていないはずの素人の子どもたちとやることもたらず葛藤や困難、それらとともに感じる「喜び」や「楽しい」といった感情がないまぜになった感覚であり、ほとんどの場合、印象深い出来事として語られた。第三は、送り手が描く放送の将来像についての見解である。子どもたちとの協働実践という刺激的ではあるがマイクロな経験を経た送り手たちの多くは、マクロといってよい放送局の将来について語るようになったのだ。第四は放送局のメディア・リテラシー実践活動のあり方についての見解である。その内容は一部

表4 語りのカテゴリ

カテゴリ	内容
マスメディア批判	社会的なメディア批判に対する意識。送り手自身のマスメディア批判
「ハードファン」	実践の苦しさをともなう楽しさ。印象的な出来事
放送の将来像	実践を経て描くようになった放送の将来像についての見解
実践活動のあり方	実践を支える局の組織や体制のあり方についての見解
メディア・リテラシー	メディア・リテラシーに関する考えや思い

分、第三の放送の将来像へと展開している。第五はメディア・リテラシーに関する考えや思いである。

これら5つの相関は、図のように表すことができる。すべてのインタビューを通して最も量的に多かったのは、「ハードファン」として整理される語りだった。「ハードファン」が民放連プロジェクトでだれもがまず経験することがらとして、土台のような位置にあると考えてみよう。すると「マスメディア批判」「放送の将来像」「実践活動のあり方」は、この土台の上で生まれ、醸造された言説として位置づけられ

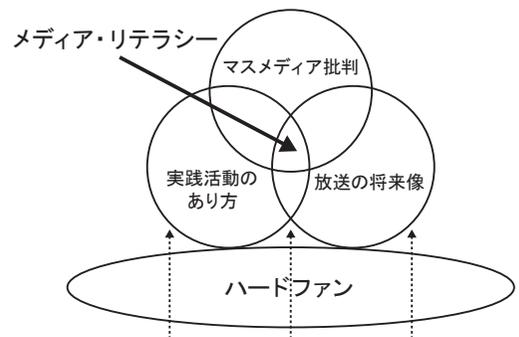


図 語りのカテゴリの相関

るだろう。このうち「マスメディア批判」はおもにインタビューの前半部で語られることが多かった。「メディア・リテラシー」をめぐる語りは、その3つのいずれにも関わる中心的、統率的な位置にあるとみることができる。

KBC実践から浮かび上がった「受け手像の刷新」と「構造的状況認識の獲得」は、このように相関する5つのカテゴリーに整理された実践経験者の語りのなかでどのようなかたちで見出せるだろうか。

表5 カテゴリー別・送り手のインタビューの主な内容

	過去に民放連プロジェクトを経験した送り手
マス メディア 批判	<p>A氏:「(メディア蔑視に対して)実際にテレビに入る前の自分はどうだったのかというと、それは大差ないから、そうすると、今のテレビのままでいいんだろうかと、これを少なくとも、わかりやすくいえばもっと地位を高めたたい」「僕たちがやってきたことは何をやってんだと、どういう影響力をもっちゃったんだと。(自己検証は)自分の気持ちの中を、心の中をえぐる作業ですよ」</p> <p>E氏:「すべてはギャップから生まれる。(視聴者に)好いてもらおうと思う」「昔はテレビは放っておいてもみてくれるものだった。それがテレビの人のプライドの高さを作った」</p> <p>C氏:「(視聴者からの意見や批判に対して)そうじゃないんだけどなあ。どこかで言う場がないかなあとか。(中略)なんだかだまってられないっていいですか。そうですか、いや違うんだよって言う場がほしいですというのはあったかなと思います」</p>
ハード ファン	<p>D氏:「(子どもたちが)普段流れてくるニュースをこういう仕組みでできているんだっていうのを知って、より、たとえば自分たちのテレビを見てくれるようになる。その瞬間がわかるじゃないですか。実際に(実践を)やっている。そういうのを肌で感じる時間がちょっとでも増えていくことに喜びを感じるんです」「(メディア・リテラシー実践には)スタジオの向こう側が見えてっていうのがありますけど、そういうのをもう少ししていかないと、見てる側もそうですけど、送り手の気持ちっていうか、そういうのが目覚めていかないんじゃないかと思う」「生徒たちの学校に帰ってからの変化が大きいですっていうふうに(先生が)言ってくださって。そういうの聞くとやっぱりうれしい」</p> <p>C氏:「やっぱり間近に見られないもんですからね。(視聴者の)リアクションっていうのが。番組やりながら、視聴者センターからいろんなことがあがってくるんですけど、“文字情報”ですからね。生で感じる、やりとりするっていうのは、おもしろいなあっと思いましたね。やりがいにつながるなあとか。(中略)日頃顔が見えないもんですから」「生の声が聞けるとか、目の前で表情が変わるっていうのは、メディアで働く人間の醍醐味ですよ」「あるカメラマンは、意外にこうやって伝わるだろうと思ったら伝わっていかなかったとか。僕らディレクターはこういう表現をしたら伝わるだろうと思っていたけれども受け止め方としては違ったかなあとか。(中略)自分を客体化して、改めて、自分たちの仕事、私たちは何を、からはじめて、この仕事ってなんだろうっていうところがわかった」</p> <p>B氏:「子どもたちの反応を見るのも楽しかったし。活動は楽しかったですね。こんなテキストをつくり、こんな本を読んでもいけば喜ぶんじゃないかとか」「自分の取材してきたものを視聴者にみってもらうことは1つのプレゼンテーションですよ、それが放送じゃなくて教室にかわったという。(中略)だから教室も1つのメディアだと思ったんです。だから、子どもたちに自分が説明していったことを勘違いしてうけとられることも何回かあるんですけど。(中略)メディア・リテラシーって結構骨折れるぞと(思いました)」「ジャーナリズムとセンセーショナルリズムは違うんだよって。(中略)そういう違いを高校生に知ってほしかった。願いをこめてもっていったら、ワイドショー的なものをみせたほうがわかりやすかった。あらーと思っちゃってね。あれはちょっとカルチャーショックでしたね」</p> <p>A氏:「自分でみる自分ってというのは限りがあるから、人の目でみつめてみるっていうのも必要だろうし、自分がみえない自分の姿ってものを人に言ってもらえないって感じじゃないかな」「子どもたちと接して、子どもたちからみた私たちって違うなあとか。同じ現象を子どもからみたら別の風にあててるんだとか。(中略)子どもとの接し方。私たちの方もいつも悩んでいるんです。これで本当にいいのかなあとか、これへたするとクビかもしれないなあかと思いつつ、でもやらなきゃいけないなあと思いつつながら」</p> <p>E氏:「視聴者に好かれない」</p>
放送の 将来像	<p>E氏:「メディアの信頼性に返ろうと思った。局員一人一人が、ビジネスチームの中にいるんだと。メディア・リテラシーの世界に入ったらからそう思うようになった」「(実践を経験して、)設計図を描こうと思った。そうすると(局の)本来あるべき姿がみえてきて、人に話すときにわかってもらえるようになった」</p> <p>D氏:「テレビの役割が変わってくるのもそうだけど(中略)この先10年、5年かもしれないけど目先のものがどうなっていくのか全然見えない。すごく、その、悲哀ですよ。(中略)リテラシーの取り組みをやっていくと、それこそ生命力の維持じゃないですけど、現場の熱意であったり、そういうものが少しでものびるんじゃないか、消えないでいくんじゃないかというのを思っています」</p> <p>B氏:「テレビ局にいるから特別な存在だということはいえなくなるんじゃないかなって感じがしますよね。それが人よりも少し早く、リテラシー活動をやることによって、市民の情報発信に興味がある人たちと多少交流する中で、少し早く感じる事ができた。それが今の仕事に結びついているのがよかったです」「基幹メディアというプライドも持っているし、経営者もプライドを忘れずについていますよね。それは大事なことなんだけれど、一方で、素人がつくるものは(中略)いろんな危ういものが玉石混濁で確かにまわっていますけど、でもなかにはいいものもあるんですよ、プロがきつかないうような小さなものを拾っているものもあるだろうし。(中略)はじめてみて(気づいた)、こちらの強みあるし弱みもあるしね」</p> <p>C氏:「いま取支があぶないですけど、たとえばウェブを使って双方向ができますんで、そういうで商売にはならなくても、メディア・リテラシー活動ができたりするんじゃないかなあっていうことを時々考えます」「外的要因は変わってきていると思うんですけど、いろんなテレビの不祥事もあったり、そこで学びとろうっていう姿勢が全局にあると思うんですけど、(中略)メディア・リテラシーってもっと広いものなので、何かこれでできればいいんだけどなあって思うんですけど」</p>

<p>実践活動のあり方</p>	<p>A氏:「一人とかなんかでやっている」と限度があるので、それは早くから複数にしないと、自分が異動になったらどうできるかわからない」「チームをつくって、仲間がいた方がなんとなくあいつのやっていることで、ん？という風に見える」「(中略)いくらかつかつていくと思う。でもやっぱり冷めた目で見ていた人はいつもの」</p> <p>B氏:「せっかくお金をかけて、手間ひまかけて(メディア・リテラシー活動に)取り組んで、個人のその財産になっても、社としての財産として残っていかなければ、継続性がないな」「うちがよかったのは、メディア・リテラシーの活動でいってるときは、ほかの取材をしなくていいわけですよ、それがニュースの1つ。うちはだからワイド(番組)ではなく、(デイリー)ニュースで作ったんです(中略)放送されないと自分だけ好きなことやってるみたいにしるめたい気持ちになっちゃうんですけど」</p> <p>C氏:「最初は(メディア・リテラシーに対して)ひょっとすると抵抗があったんじゃないかな。まず最初だということ。(中略)メディア批判のでていたところですね。(中略)そんな中で、あえてあの批判という言葉がつかわれるメディアを批判する能力っていうのが使われる中でそんなことやってどうするんだっていうのが社内で大きかったですね。(中略)批判をふせぐためのものですか、自分たちのやっていることを正当性を主張するためだけのものではないかというのがどこかありましてね。それをのりこえられなかった」「ひょっとすると、全体じゃなくて、個人個人がネットワークをつくってやっていくということのほうがいいかもしれませんね」「(ファシリテーターに)客観的にみてアドバイスをいただけるというのと(中略)。どうやって子どもに教えるのか。「ここで葛藤を与えるんですよ」っていうような会話があって。そうだよな。考えさせないといけないよな。わざと止まって、子どもたちもやらわかないとメディア・リテラシーにならないよなっていうのがあって、すごく参考になりました」</p> <p>D氏:「何もないところで、会社の中で、こういうふうなの大事みたいなのって、これはなかなか、まだまだメディア・リテラシーっていうのはむしろかしいかなというの思います。(中略)民放連の存在って大きいなと感じる部分があって、そうだったところを力かしてくれるところがあればいいなと思う」「私は、(最初の)1年で、あとは絶対やれないと思っていた。(中略)そしたら、その取り組みを、県の方がアンテナをはって見てくださったんです。(中略)地域の人たちを育てるっていうことでもなにかできないかなって(提案があった)」「外の人たちの意見を聞ける場っていうのがあった方が継続の可能性というのとはでてるのではないかとすごく思うんですよ」</p>
<p>メディア・リテラシー</p>	<p>A氏:「ニュースのやり方、こういうのでいいのかなって思うのが、まさにメディア・リテラシーだと思うんですよ。今のメディア・リテラシーっていうのは、受け手の側からどうしたってみようかな文脈になってしまいますよね。一番最初に思ったのは、メディア・リテラシー=自分のリテラシーっていう接し方だったんですよ。それが(民放連プロジェクトの参加中高生たちと接するようになって)そうか。メディア・リテラシーって、自分が勉強しているから受け手なんだけど、視聴者とか子どもたちからみたら、送り手のメディア・リテラシーに対して、彼らが接しているわけだから、そこで気づいた。それを言葉で言うて送り手と受け手のコラボレーション」「(報道の)検証をやっていることが、後になって呼べばメディア・リテラシーだけど、あくまで送り手である自分にとどまっているリテラシーですよ。(中略)出発点がそこで、子どもたちと接する時点で、いわゆるメディア・リテラシーに気づいたというか、うまれてきた」「人によっては自虐的になって言い方になるので。(中略)人から見るとそうみえるかもしれない。ただ、明日の自分がどうあるべきかっていうのを考えるために、きのうまでの自分や今日の自分を検証しておく」「みんなこれだったらつまらない、それこそ多様性がなくなってしまうんで。だからメディア・リテラシーの活動に対して批判的な人があるのも自然なことだと思うんですよ。自分たちに対する批判の目をやしなうと、それで厳しい目をむけられるのはプラスにならないんじゃないかって言う人もいますよ」「(実践は)考えた訳じゃなくて、やらざるを得ない連続だった」「受け手側のリテラシーにつきあっている送り手というのは、常にそのレベルで接しているから、たぶんプラストレーニングがたまってくると思う。何かほかのしかけがあればいいと思う。私は、あのときの中高生のまなざし、こたえたとときの緊張感と、あそこにもまれたこの空気っていうのは、そう簡単には乗り越えるものはないってずっと思っています。(中略)はくらが本当にやるべきリテラシーっていうのは、そこまできなくて、なんかやったことにならない気がするんですよ。それがあってはじめてこどもも鍛えられる」</p> <p>B氏:「今まで私たちがやってきたのはテレビ・リテラシーじゃないですか。メディアっていったら新聞から、教室も1つのメディアだろうし(中略)要するに情報発信するものがすべてメディアと捉えれば、これからのことを考えれば、テレビだけやっても、情報を読み解くとかでは、(偏っている)」</p> <p>C氏:「(最初は、メディア・リテラシー)を日本語にするにも苦労しました。読み書き能力か、うーんって」「(実践を)いろんなことに広げようと思って提案したんですけど、それをやらなくてことに決めた理由は、やっぱり、それ(メディア・リテラシー)は、日々の取材の中で答えを出していくものだよっていうことで」「子どもはまだ小さいんですけど、いまあの(実践の)経験をもとに、子どもに言っていることもありますね」「こっちはずっとあっていてと思っていたのが、ずっとあっていなかったというのがわかったですし、子どもたちはこういうところに疑問を持つんだっていうこともわかったっていうのが、じゃあこれをどういかにそうかなっていうところを考えると、何か次行動に、空気や水みたいに、そういう精神とか、生き方っていうのか、何か仕事の仕方っていうのをやっていったらいいのかなあ。個人的な作業でもいいのかなっていう気はしています」</p>

3.2. メディアをめぐる総合的な人間像への到達

受け手、視聴者をめぐる語りの大半は、「ハードファン」のカテゴリーに属している。むしろかしいけれど面白い、苦しいけれど楽しいことを指す「ハードファン」は、どの送り手のインタビューでももっとも多く語られた。この

点はKBC実践と同様であった。しかし実践を積み重ねてきた送り手、過去に経験した送り手たちが抱く受け手像は、より幅広く、立体的なものに展開していた。ここでは3点を挙げておきたい。

(1) 受け手との対話の意義に気づく

民放連プロジェクトで経験する受け手との協働は、取材などの生産活動上の関係とは違い、得難いものだと送り手は語った。背景には、「日頃は顔が見えない」子どもたちが変わる瞬間を「肌で感じられる時間」という語りのように、放送の送り手にとって、受け手の反応は普段、伝わりにくいことがあった。現在の日本の放送局の日常業務（視聴者センターなどの部署を除く）では、視聴者の生の声や、彼らがテレビをどう見ているかを直接的に知る機会には皆無だといってよい。視聴率という指標や、視聴者参加番組、投稿メール・FAXなどに加え、視聴者センター、モニター調査、番組審議会などのシステムはあっても、それらはあくまで、あ

らかじめ送り手側の意図で用意された特別な場にすぎないのだ。さらに、その実情に対して、送り手の1人は、視聴者の声を「聞く」だけでなく、自分からも「言う」機会が欲しいと語った。

「（視聴者からの意見や批判に対して）そうじゃないんだけどなあ。どこかで言う場がないかなあとか。（中略）なんだかだまっていられないっていいですか。そうですか、いや違うんだよっていう場がほしいですというのはあったかなと思います」。

このように受け手との対話の意義に気づくことが、受け手像の刷新の出発点にあるといえる。

(2) 立場を操作的にとらえる

受け手と向き合い、対話する機会を得た送り手は、やがて送り手と受け手という固定されたあり方に居心地の悪さを覚え始めるようだ。それはもともと民放連プロジェクトに、受け手である生徒たちが送り手、制作者の立場に立つてみることに、送り手である局員が視聴者の日常のリアリティを想像する立場に立つてみることを、ワークショップを通じて一時的ではあれ経験するようなプログラムが仕組まれていることに起因する。

「自分が見えていない姿を人に言ってもらう」「生の声が聞けるとか、目の前で表情が変わるってというのは、メディアで働く人間の醍醐味ですよ」「送り手側の気持ちが目覚める」。

このような語りは、受け手が送り手の立場に立つこと、送り手が受け手のリアリティを想像することなど、立場を操作的にとらえ、経験や思考を構成的にとらえることの意義に気づいたことを裏付けているといえるだろう。

(3) 持続的循環のむずかしさ

以上の気づきは、送り手と受け手の持続的循環としてのマスコミュニケーション現象への覚醒にもつながっているようである。

「子どもたちに自分が説明していったことを

勘違いしてうけとられることも何回かあるんですよ。（中略）メディア・リテラシーって結構骨折れるぞと（思いました）」。

「私は、あのおときの中高生のまなざし、こた

えたときの緊張感と、あそこにうまれたこの空気っていうのは、そう簡単には乗り越えるものはないってずっと思っています。(中略) ぼくらが本当にやるべきリテラシーっていうのは、そこまでいかないと、なんかやったことにならない気がするんですよね。それがあってはじめてこっちも鍛えられる」。

これらの語りは、(1) (2) に覚醒してしまったからこそわかる、持続的循環のむずかしさを吐露しているといえるだろう。ここではもは

3.3. 構造的状況認識の進展

次に、構造的状況認識の獲得についてみていく。これに関わるであろう語りは「放送の将来像」というカテゴリーに最も多く見出せた。5名の送り手はいずれも、民放連プロジェクトに積極的に参加した人物であり、もともと局のあるべき姿に対するビジョンを持っている人が多

(1) 放送局内の構造的状況認識

一般的に言って放送局では、部長やプロデューサーといった特定の役職に就くまでは、局の財政状況、人事体制などといったマクロな構造的情勢を把握する機会はほとんどない。また報道、スポーツ、制作、編成、営業など部署間の異動も限られており、「テレビ局は、よく考えると全部を見た人がいない」と語った送り手もいる。今でこそ経営悪化から経費削減が叫ばれ、以前よりは多くの人々が構造的情勢を気にかけるようにはなってきたが、一般企業に較べればおしなべて送り手はこうしたことがらに疎いといえる。

ところが民放連プロジェクトでは、2006年

や受け手像ではなく、送り手像の刷新までを射程に入れた認識が高まっていることがわかる。

このようにみえてくると、KBC実践では受け手像の刷新に留まっていたが、ここでは送り手か受け手かという区分が、もはや循環的で操作的な役割に過ぎないことが前提として理解されており、それらが混然一体となったメディアに関わる総合的な人間像の認識へと至っていることがわかってくる。

かった。その視点は報道のあり方、営業戦略、社会連携などさまざまだったが、実践を通して「自信がついた」り、具体的な活動の展開へとつながった人が多かった。

インタビューを読み込むと、構造的状況認識には二つのタイプがあった。

度以降は民放連から委託金として100万円が支給され、その範囲内で実践を進める必要があった(実践局からの持ち出しはしてもよいが過去には皆無)。関係する局員らは100万円という資金のなかで、子どもたちとワークショップをし、番組制作をし、オンエアまでもっていく必要がある。疎いなどと言っていられない。

「フリップ作りにもお金がかかってということもわからなかったですし、中継車が一回いくらかかるのかもわからなくて、1つ1つやりながら知ることになって、ああこれだけお金が動くんだというのは勉強になりました」というように、プロジェクトを遂行すると、必然的に

金や人の流れに直面する。それまで知らなかった局内の人間の力学関係を初めて知ることもある。

そうした経験が、局の将来ビジョンをより構造的なものにする契機となることもある。岡山放送の高橋誠氏は、局内各部署の人々の認識をなかばカリカチュアして、「“技術”はみんな鉄塔だと思っているし、“報道”はニュース、“営業”は百万、一千万（円）のやりとりしかみえていない」という。しかし民放連プロジェ

(2) 社会と放送の構造的認識

二つ目は、社会の中に放送局を位置づけ、構造的にとらえる認識である。

たとえば2006年度実施局の青森放送（RAB）では、青森県の人材育成関連の事業予算を弘前大学などと協力しながら獲得し、地域の人材を高校生が放送番組として紹介するなかでメディア・リテラシー活動を続けている。その過程で「あおもりメディアリテラシーネットワーク」（代表：児玉忠弘前大学教授）という団体も設立された（山内，2009：19）。中心的実践者であった青森放送の山内千代子アナウンサーは、「自分のやりたかったことは、ネットワークづくりとか環境づくり、そういうことだったのかなあってすごく思うんです」、「各機関のトライアングルみたいなものが、いまがんばって作れてというか、それがすごくうれいんです」と語った。また、そうした活動を「自分の置き場所」だとも語っていた。局のあるべき姿を構造的にとらえ直し、活動することは、送り手自身のアイデンティティとも深くつながっているようだ。

クトのために社内横断的なチームを編成して進めた経験から、実践後は、局員1人1人を同じ「ビジネスチーム」の仲間としてとらえ直すようになり、局の設計図を描き直すようになったと語った。

その他、営業と報道の部局を超えた協力関係を築こうとした送り手もいた。いずれの場合も民放連プロジェクトによって、放送局自体を構造的にとらえ直す認識が高まっていったことを物語っている。

また2001年度、02年度にパイロット研究になったテレビ信州は、2008年から社会教育施設「長野市フルネットセンター」の指定管理者となり、ここを拠点に番組づくりを通じたメディア・リテラシー実践や、この施設で運営されているインターネット放送「愛TVながの」で地元企業や行政、大学、観光などの地域情報とともに市民のビデオ映像を流したり、メディア・リテラシー実践の記録をアップしている。プロデューサーである湯田邦彦氏は「（実践を経験して）少しは視野が広がった部分もあるのかなっていう気持ちはしますね。誰でも情報発信できる時代ですよ。（中略）テレビ局にいるから特別な存在だっていうことはいえなくなるんじゃないかなって感じがしますよね。それが人よりも少し早く、リテラシー活動やることによって、市民の情報発信に興味がある人たちと多少交流する中で、少し早く感じる事ができた。それが今の仕事に結びついているのがよかったなあ」と語った。局のあり方、あるいは放送自体の将来を、より広いメディア状

況の中でとらえられるようになったという。

いうまでもなく、放送局内部と外部の認識はつながっているか、いずれはつながっていくはずだ。そしてそのことは、メディア・リテラ

シーを手に入れた送り手と受け手の協働によって新たなマスメディアを新生していこう、というビジョンを導き出すことになるだろう¹³。

4. 送り手のメディア・リテラシーの課題と可能性

この論文で取り上げた送り手の語りは、紙幅の制限もあり、メディア・リテラシーへの覚醒と実践後のその変化に関わるものに絞っている。しかもここまでの分析は、個別の語りの中身を抜き出して検討を加えるという段階に留まっており、そこから導き出された送り手のメディア・リテラシーの構成要素も全体を網羅したものだとはいいがたい。今後、より本格的な実証的分析と理論的展開を図らなければならない。ちなみに、この他のインタビューでは民放連プロジェクトの課題や限界を批判的に語るもの、メディア・リテラシーへの問題提起など興味深い語りが数多くあった。それらは別の機会に吟味したい。

最後に、ここまでの知見から送り手のメディア・リテラシーをめぐっていえることを列挙しておきたい。

送り手にとってのメディア・リテラシーとは、すでにそばにある日常的な生産活動を、構造的に見直していくということが、大きな焦点になってくるのでないだろうか。送り手にとっては、働く場でもあり、表現の場でもあり、利用の対象でもあるメディアの様相と、メディアと自らの関係性を、構造的に見直す視座を獲得することが、まず重要だと思われる。もちろん、送り手がメディアとの関係性を一度切り離

し、突き放し、批判的にとらえ直していくという意味では、受け手にとっても送り手にとっても、メディア・リテラシーの活動の過程は何ら変わらない。しかしながら、問題は、その溶け込み方に違いがあることである。送り手にとってメディア・リテラシーはどこか遠くにある何かであるような客体物としてとらえられてしまったり、あくまで受け手のためにおこなう社会的活動ととらえられがちである。それはメディア・リテラシーの第一義的な意味合いへの拒否反応や、メディア・リテラシーという概念の曖昧さなどが影響していると考えられる。しかし、マスメディアの送り手にとって、メディアと自分との間には、受け手のそれとは違った関係性がある。メディアは生業でもあり、送り手としての自らのアイデンティティに深く溶け込んだ存在なのだ。それが送り手の警戒心やプライドとも関連していることは、これまでも指摘されてきているところである。そうした複雑な関係性をひきはがす難しさを乗り越えていくような枠組みやしかけが、今後求められるだろう。

その上で、民放連プロジェクトの仕組みそのものについても、より構造的に見直していくことが必要である。何度も言うように、民放連プロジェクトは、受け手と送り手が学び合うメ

ディア・リテラシー実践としてとりくまれてきた。しかしながら、送り手の学びに対しては、水越・山内が指摘するように、送り手の「センスと気づきに頼ったもの」であり、システム化されていなかった（水越・山内祐平, 2003）。本稿の送り手インタビューでも、「受け手側のリテラシーにつきあっている（だけの）送り手というのは、常にそのレベルで接しているから、たぶんフラストレーションがたまってくると思う。何かほかのしかけがあればいいと思う」というように、送り手の学びを支えるような実践の枠組みを求める声もあった。

そのためには、これまでは「メディア・リテラシー実践」ととらえてきた民放連プロジェクトを、送り手の省察的实践としてとらえ直すことはできないだろうか。インタビューをみると、その後の実践の継続の有無にかかわらず、送り手は日常的な情報の生産活動を省察するようになっていた。それは、研究者や実践に参加する子どもたちといった第三者が介入することで、送り手が主体的に情報の生産活動の課題を発見し、それを乗り越える道筋を探していく過程として、一種の送り手のアクション・リサーチとしてとらえることができるだろう。

アクション・リサーチは、教師教育や社会心理学、経営工学、看護学などの分野で広く取り入れられている研究方法である。その定義や手法は、テーマや研究領域に応じて様々であるが、20世紀半ば、アクション・リサーチを提唱し、グループ・ダイナミクスの領域を確立したK.レ빈は、「It proceeds in a spiral of steps, each of which is composed of a circle of planning, action and fact finding about

the results of the action”（Lewin,1946）、つまり「企画（planning）」、「実践（action）」、その成果を「実証（fact finding）」するというステップのサイクルをスパイラル（螺旋状）に進んでいくものとした。その伝統的定義をうけ、最近でも「アクション」と「リフレクション」のサイクルを含んだ経験的論理的な問題解決過程であることが強調されている（Reason & Bradbury, 2008）。また、草郷孝好は、アクション・リサーチは1つの定義づけはむずかしいとしながらも「常に変化していく社会が抱えているさまざまな問題に対して、研究者と一緒に個々の問題の当事者が自身の解決策を考えその解決策の有効性について検証し、検証結果をもとにして、自身の解決策を修正し改善していくことで問題解決を目指す調査活動手法」「当事者（実践者）による問題解決の『プロセス』を重視したリサーチであり、当事者自身が問題解決の進み具合を測りながら、その実践活動を向上させるためのさまざまな手法の集合体」と指摘している（草郷, 2007）。

送り手を「実践者」ととらえれば、民放連プロジェクトは、研究者やNPO、自治体など多様な人たちを含めた参加型の実践的探求である。放送の送り手を対象としたアクション・リサーチという枠組みでとらえ直せば、これまでとは違った新たな展望が開けてくるだろう。たとえば、2010年度に民放連プロジェクトが取り組んでいる過去の参加局のフォローアップは、「リフレクション」という実践スパイラルの1ステップととらえることもできる。また、これまでの方法とは違った実践のあり方の探求

もあるだろう。一方で、今回インタビューに答えてくれた送り手は、いずれもメディア・リテラシー実践に対して、意義を見だし、主体的に向きあっていた送り手ばかりであったが、民放連プロジェクトの参加者には、そうでない送り手ももちろんいるだろう。その中で、自ら「実践者」として主体的に取り組むようになった経験を、送り手自身がより分析的にとらえ、望ましい送り手のメディア・リテラシーとは何かについてより積極的に取り組んでいくことも求められているかもしれない。

そして、こうした送り手のメディア・リテラシーをめぐる特徴は、送り手研究の課題や困難とも重なり合ってくる。送り手のメディア・リテラシー活動は、新しいタイプの送り手研究を生み出す原動力となるかもしれない。メディア・リテラシー実践を新たなパラダイムでとらえていくことは、送り手の警戒心や資料の不足といった、送り手研究の困難を乗り越えていくきっかけにもなるだろう。このあたりは、今後の研究の可能性として提起しておきたい。

註

- ¹ 正確には2001年度、02年度のパイロット研究が「日本民間放送連盟メディアリテラシー・プロジェクト」、06年度以降の公募型の活動が「日本民間放送連盟メディアリテラシー実践プロジェクト」とされるが、プロジェクト内容は基本的に同じスタイルを採っているため、関係者の間ではまとめて民放連プロジェクトと呼ばれている。ここでもそれを踏襲する。01、02年度はメルプロジェクトが、06年度以降は水越研究室が推進母体となっている。
- ² 各年度ごとに『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』（日本民間放送連盟）が刊行されており、各地における実践の具体的内容はそれらを参照されたい。同プロジェクトをもとに編まれたテキストとして、東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編（2005）などがある。総括的な論考として水越伸（2005）などがある。
- ³ メディアリテラシー研究会（1997）。これは日放労の幹部と水越を含む大学研究者らの混成チームで研究を進めた成果である。
- ⁴ 「送り手のメディア・リテラシー」という概念は、文献の上ではメディアリテラシー研究会（1997）で初めて登場する。その総編として日本放送労働組合（2000）があり、ここでは明確に「送り手のメディア・リテラシー」が中心概念となっている。その後、やはり日放労と関わりのあった黒田勇、音好宏らによる黒田編（2005）が刊行された。ただしここには各地放送局の送り手らの番組制作などに関するレポートが載せられているだけで、メディア・リテラシーの観点からの記述はみられない。
- ⁵ 2006年度から2008年度までの民放連プロジェクト報告書における駒谷真美の分析を参照。
- ⁶ 筆者の水越と林田は、いずれも民放連プロジェクトに関わり、実践の企画運営、ファシリテーションなどをやってきた関係者である。ただしこの論文は同プロジェクトから切り離れた独自の研究成果である。1と3は水越が、2と4は林田が分担執筆し、全体の調整を水越がおこなった。インタビュー調査は林田がおこなった。
- ⁷ 送り手研究に関しては、高木（1973）、水越（2006）などを参照されたい。
- ⁸ KBC実践の詳細は2009年度の『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』（日本民間放送連盟）を参照されたい。
- ⁹ 駒谷による参加者調査報告の詳細は、2006年度から2008年度の『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』を参照されたい。またインタビュー対象者は大濠高校の男子生徒、筑紫女学園高校の生徒いずれも1年生と2年生。KBCは入社14年目の局員と8年目のディレクターである。記して心から感謝したい。
- ¹⁰ インタビュー当時、民主党の小沢一郎幹事長（当時）の資金管理団体をめぐる政治資金規制法違反事件や、横綱・朝青龍（当時）の知人への暴行疑惑が、ニュースとして頻繁に取り上げられていた。
- ¹¹ インタビューを受けていただいたインフォーマントは次のとおりである。
（肩書きはインタビュー当時）
A氏：倉田治夫氏（テレビ信州常務取締役、総務局長）
2010年6月30日 長野市フルネットセンターにて約2時間

B氏：湯田邦彦氏（テレビ信州報道制作局、長野市フルネットセンター総合プロデューサー）

2010年6月30日 長野市フルネットセンターにて約2時間

C氏：春田亮介氏（東海テレビ総務局次長）

2010年6月4日 東海テレビ（名古屋市）にて約1時間半

D氏：山内千代子氏（青森放送アナウンサー）

2010年2月1日 青森放送（青森市）にて約2時間

E氏：高橋誠氏（岡山放送取締役）

2009年12月18日 岡山放送（岡山市）および市内にて約4時間

実践を共同でおこなう「マス&コミュニケーション・プロジェクト」メンバーの境真理子氏（桃山学院大学）にも、実践サポート的な役割という立場としてインタビューをおこなった。皆様のご協力に心から感謝を申し上げる。

12 ババートは、自らが開発したプログラミング言語、LOGOを使っている子どものつぶやきからこのことばを生み出したと語っている。

Papert (2002)。

13 水越伸「メディア・リテラシー、パブリック・ジャーナリズム：新聞の市民協働型リデザインのために」濱田純一・桂敬一・田島泰彦編著（2009）『新訂 新聞学』（pp.363-381）。

参考文献

- 草郷孝好（2007）：「アクション・リサーチ」小泉潤二・志水宏吉編『実践的研究のすすめ 人間科学のリアリティ』（有斐閣）、pp.251-266。
- 黒田勇編（2005）：『送り手のメディアリテラシー：地域からみた放送の現在』世界思想社
- 高木教典（1973）：「マス・コミ組織集団の研究」高木教典ほか編『講座 現代日本のマスコミュニケーション4』青木書店
- 東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編（2005）：『メディアリテラシーの道具箱：テレビを見る、読む、つくる』（東京大学出版会）
- 日本民間放送連盟『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』（2006年度、2007年度、2008年度、2009年度）日本民間放送連盟
- 日本放送労働組合（2000）：『送り手たちの森：メディアリテラシーが育む循環性』日本放送労働組合
- 水越伸（2002）：『新版 デジタル・メディア社会』岩波書店
- 水越伸（2005）：「循環型情報社会を目指した新しいメディア・リテラシーの展開」青木塾・天野勝文・山本泰夫編『ジャーナリズムの情理：新聞人青木彰の遺産』、産経新聞出版、pp.160-177
- 水越伸（2006）：「送り手研究のこと：その限界と可能性をめぐる覚書」『東京大学大学院情報学環紀要』No.71、pp.151-156
- 水越伸（2010a）：『2009年度・民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』日本民間放送連盟、pp.110-113
- 水越伸（2010b）：「07年度民放連メディアリテラシー・プロジェクト報告論考」東京大学大学院情報学環マス&コミュニケーション・プロジェクト、テレビ朝日広報局お客様フロント部『2007～09年度 ろっぽんプロジェクト報告書』、pp.132-138
- 水越伸・山内祐平（2003）：「メルプロジェクトのパーспекティブーメディア表現、学びとリテラシー」水越伸・吉見俊哉編『メディア・プラクティス』せりか書房、pp.170-184
- メディアリテラシー研究会（市川克美・音好宏・見城武秀・後藤繁栄・藤本浩・水越伸）（1997）：『メディアリテラシー：メディアと市民をつなぐ回路』日本放送労働組合、pp.180-187
- 山内千代子（2009）：「拡がる場、深まる“学び”と“気づき”」『月刊民放』9月号、日本民間放送連盟
- K. Lewin（1946）：“Action research and minority problem”，Journal of Social Issues, The American Psychological association.
- P. Reason& H. Bradbury, eds.（2008）：Action Research, SAGE Publications Inc.
- Seymour Papert, “Hard Fun”，article for the Bangor Daily News (Bangor, Maine) in 2002, <http://www.papert.org/articles/HardFun.html>



水越 伸 (みずこし・しん)

1963年3月6日生まれ

[専攻領域] メディア論

[著書・論文]

『メディア・ビोटープ：メディアの生態系をデザインする』紀伊國屋書店、2005年

『新版デジタル・メディア社会』岩波書店、2002年

『メディアの生成：アメリカ・ラジオの動態史』同文館出版、1993年

[所属] 東京大学大学院情報学環

[所属学会] IAMCR、ICA、日本マス・コミュニケーション学会、日本社会情報学会



林田真心子 (はやしだまみこ)

1973年1月3日生まれ

[出身大学又は最終学歴] 九州大学教育学部、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了

[専攻領域] メディア論

[主たる著書・論文]

「カメラとテレビ表現—フィルムカメラとテレビの送り手に関するメディア論的研究」『東京大学大学院情報学環紀要 NO.71』、2006年

「世にもまれな地図づくり—携帯されるカメラをめぐる」水越伸編『コミュニカルなケータイ』岩波書店、2007年

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、日本社会情報学会